

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

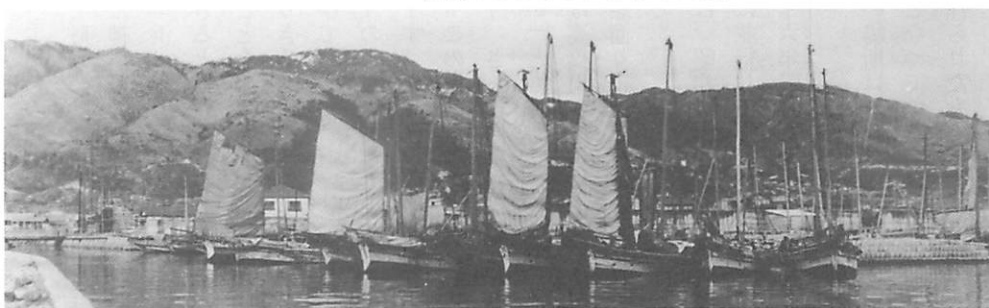
<史料館だより>

目 次

- ◇深江物語(3) — 昭和20年代の深江浜を歩く — 森口健一 2
- ◇本庄小学校の二宮金次郎像 藤川祐作 8
- ◇深江弁あれこれ 深江塾 10
- ◇本庄小学校の歴史的な写真と展示 大国正美 16
- ◇トライやるウィークと史料館 高田祐一 18
— 本庄中学校の生徒を受け入れて —
- ◇ホームページアクセスの現状 高田祐一 19
- ◇史料館日誌抄 道谷 卓 20

2013. 3.31
NO.41

高橋川下流にあり、本庄港とも深江の港、高橋の港とも呼ばれた。高橋川西岸から六甲山を望む景観。昭和24年（1949）に高橋川を改修した際に整備に着手し、昭和26年に完成した。係留されている漁船は打瀬船で、写真に見える帆は伸子帆（しんしほ）と呼ばれる縦帆である。伸子帆とは竹の細串を横に通し、帆柱に対して蛇腹式に伸縮できるようになっていた。



昭和29年の本庄港（喜多一晴氏撮影）

神戸深江生活文化史料館

深江物語(3)

昭和20年代の深江浜を歩く

深江塾 森 口 健 一

高橋の港(本庄港)

深江駅を降り、大日神社を左手に見て当時深江銀座通りと呼ばれた



写真1 昭和20年代末ごろの深江の航空写真(清家直衛氏提供)

た道を南に行くと家並みや店舗が尽きる場所に内海の牛舎がありました。その南には「草の生えた広場」があります。この広場は後に国道四三号線になり、今の深江交差点付近にあたります。昭和二十年代末ごろの写真があります(写真1)。

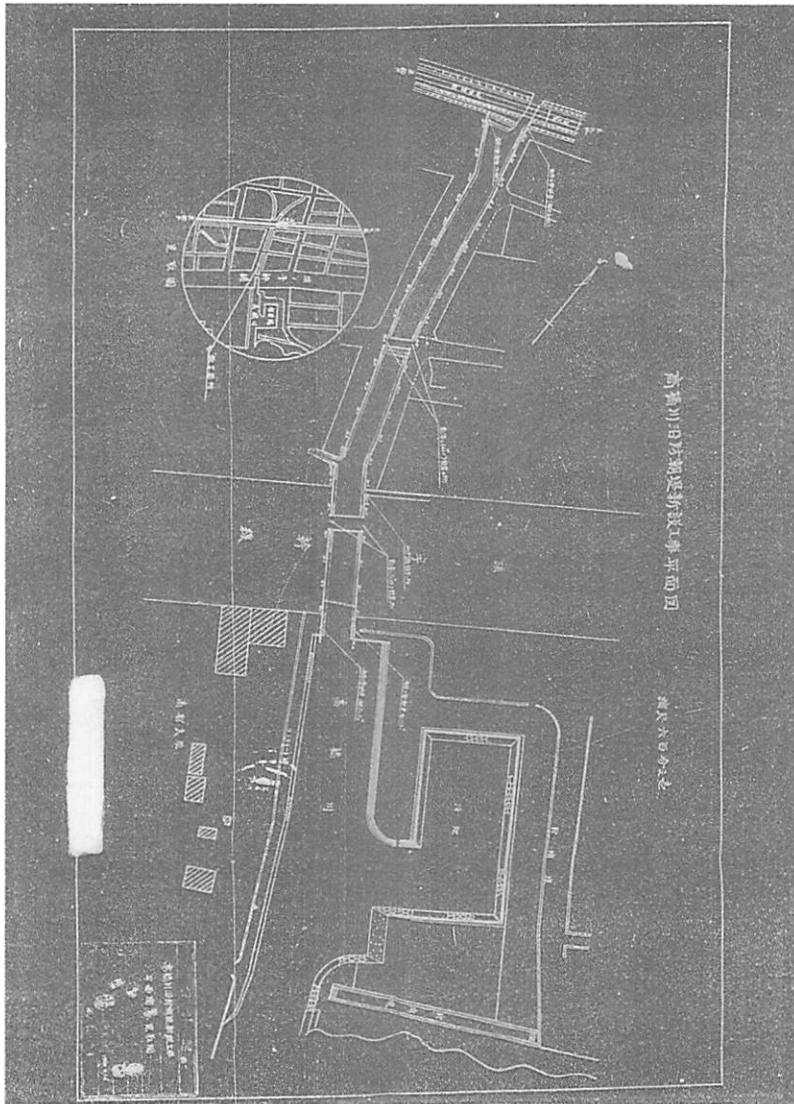
西の青木方面から幅五〇㍎で拡幅してきた道路用地は、まだ札幌筋の西までしか整備されていません。もちろん何らの工事もされていないので用地には草が繁り、牛たちの憩いの場になっています。子どもたちが「内海の牧場」と呼んでいた場所です。

昭和二十七年に作図された神戸市の防潮堤工事設計図(設計図面1)には、国道四三号線は「浜ノ手幹線」と記されています。この地域の人は新しい国道ができると言うだけで、四三号線という名称を口にするのはずっと後のことなのです。

この浜ノ手幹線用地を渡りきると、深江銀座通りからの幅員一〇㍎ほどの道が海に向かって伸びています。道は舗装されていません。この道に沿って西側に、深江の人が「高橋の港」あるいは「深江の港」と呼んでいる港があります。東灘区役所が昭和五十一年に発行した『東灘区二五年』には、この港は「本庄港」と記載されているからそれが正式名称でしょう。さらに同書によれば「港というよりは船溜りといったほうがよい」とも書かれています。この港が出来るまでは深江や青木の漁船は高橋川の岸辺に沿って係留していました。よその地の人が見れば船溜りに過ぎないかもしれませんが、地元にとっては立派な「港」です。

同時に同書には「本庄港は、昭和二十四年、建設省が高橋川を改修したときに本庄町が改修に並行して作ったもので、完成は(神戸市との)合併直後の昭和二十六年二月だった」と港造成の経緯も記されています。

戦前の地図を見れば、この場所はハンター邸跡地となっていますが、港を作るころには更地となっていた土地です。港はこの土地を高橋川の方から掘り込んで作られたものです。港はぐるりとコンクリートの防潮堤に囲まれた、東西約五〇㍎、南北約一二〇㍎の敷地です。



設計図面1 昭和27年作図の高橋川河口の神戸市防潮堤工事設計図

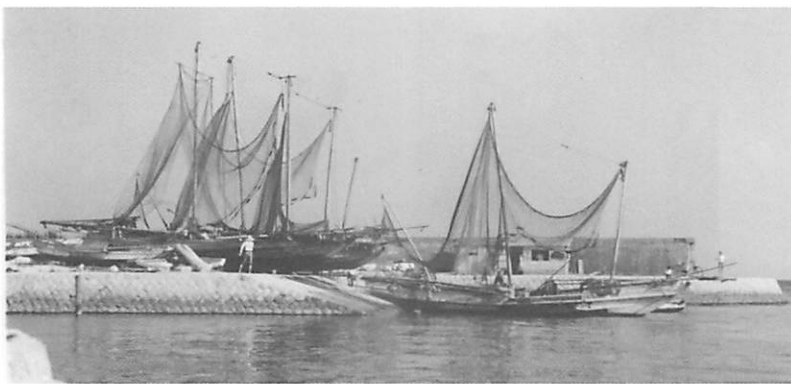


写真2 本庄港で船を「のぼす」風景（喜多一晴氏撮影、昭和29年）

船を係留する水面は東西およそ四〇呎、南北八〇呎のほぼ一対二の長方形で、水面を取り巻いて北と東西に荷揚げ場用地があります。南側は高橋川に向って西に傾斜を持った船揚場が設けられて、船揚場を上りきったところにロク口があります。ロク口は舟を「オカ」に上げる、いわゆる「舟をのぼす」ためのものです（設計図面1）。

「のぼす」という言葉は語感からも感じられるように「のぼる」から来ているものと思われれます。「のぼす」には舟を単に陸に揚げるだけでなく、陸上でないと出来ない作業が含まれています。陸に上げて船底に着いた貝殻を「掻き落とし」たり、船板の中に入り込んだ「舟虫を焼りだす」作業を行うのです（写真2）。

掘り込んで出来た港の西側は高橋川の東岸を拡幅して出来た突堤状の船着場が出来ました。今の国道四三号線を少し南に下がったところから、高橋川の幅を東に広げて川に沿って幅一〇呎長さ三〇呎ほどの施設です。この施設の西側、川から見れば東岸は垂直岸壁ではなく階段状になっています。

港の周囲の岸はコンクリート岸壁ではなくて、全て間知石けんちいしを積んだものです（設計図面1参照）。間知石とは、石垣用の建築資材で、短辺が三〇呎程度の大きさで表面は方形、奥に行くに従って細くなり全体では角錐形をしています。石垣階段状の船着場、間知石積みの様子は平成の今もそのまま残っています。

漁から港に帰ってきた漁船は「ゴスタン」で岸壁に着けます。ゴスタンとは漁師が「後へ下がる」という意味で使っていました。深江の船は大抵東の岸壁に船尾をつけていました（口絵写真）。船尾から船荷物を積み降ろしします。

打瀬船の中央部には「イケス」があります。イケスは船底の左右に丈夫な金網で出来た窓のような造りになっています。この窓を通して海水が自由に出入りします。沖で採ってきた大きめの魚はイケスにそのまま泳がせて生かしておきます。エビやシャコあるいは小魚は竹籠や袋状の網に入れて、このイケスに漬けて生かしておきます。特に夜の漁（「ようたせ・夜打瀬」）の時には、魚市場でのセリに出す翌朝までこのイケスに「生かして」おくのです。

高橋の港は西に神戸商船大学（現神戸大学海事科学部）のグラウンド、東は南に突き出た砂防突堤に挟まれた河口がその出入り口となっています。今では砂防突堤は埋め立てられてその姿はありません。

磯島の浜と海軍の防空壕

高橋の港を右に見て海岸付近に突き当たったところから、東に

向って防潮堤が伸びています。ここにある海への開口部は、深江の海岸に造られた五つの開口部のひとつで一番西に位置するものです。

開口部は海に向って一・五呎ほどの幅で開かれて海側の一〇段ばかりの階段を下りれば砂浜におり立つことができます（写真3）。この砂浜が「磯島の浜」で東西南北それぞれ約五〇呎四方の広さがあります。

西は砂防突堤が海に突き出し、南は鉄筋コンクリートではなくただモルタルで作られた堤防らしきものの残骸で海と砂地を区切っています。東側は南から続く堤防らしきものは、崩れて半ば以上が砂に埋まっています。この砂浜はほぼ正方形の土地です。南側の先は崩れた堤防のセメントがらを波が洗う岸となっています。ここは自然の砂浜海岸ではなく周囲に人の手が入った人工の砂浜です。



写真3 高橋川河口の防潮堤
昭和30年5月 右端に防空壕が見える（大西令子さん提供）

この地には旧日本海軍の対空砲が据えられた高射砲陣地（海軍では高角砲という）がありました。戦中を知る人は「高射砲陣地があつて海軍の兵隊さんがいた」といいます。この海岸のすぐ近くに海軍の航空機を製作していた川西航空機甲南工場があり、その防御のために設けられた陣地です。

昭和二十年代の後半にはその対空砲の痕跡は全くありませんでした。敗戦と同時に撤去されたのでしょう。対空砲はなくなりましたが、昭和三十五年からの海岸埋め立て工事が開始される時にはまだ防空壕がここにありました。この壕は陣地守備兵士の退避壕として使用された軍事用の壕でした。

開口部を北に向けて厚さが上部で約一呎、側壁で〇・八呎くらいコンクリート製のいかにも頑丈そうなものです。いわゆるコンクリートの打ち放しのままで、対航空機用にカムフラージュのためにそうした仕上げをしたものと思われまます。戦後の航空写真を見ても海岸にある大きな岩としか見えません。壕の入り口は大人が少し背をかがめて入れるほどの高さで、幅は大人の肩幅の倍ほどです。中に入ると急な階段が奥のほうに伸びています。この砂浜は水面から二呎以上の高さがありました。ジェーン台風の高潮で壕の中は砂がいつぱい流れ込んで、昭和三十年頃には壕には数段の階段を下りたところで行き止まりになっていました。そのため壕の内部の様子は全く分かりませんでした。

軍や武器のことで、筆者には深江の浜の子ならではの思い出があります。敗戦と共にわが国の兵器武器はそれぞれの方法において処分されました。この付近の海岸からそう遠くない海に、軍人が持っていた日本刀がかなり放棄されていたようです。昭和二十年代初めの頃には漁師が時折海から引き上げた刀をそつと持ち帰っていました。

日本刀が揚がるのは「ケタ漁」のときです。ケタ漁というのは神戸深江生活文化史料館の二階にその漁の様子とケタの実物が展示されています。たくさんの鉄の細く長い爪のついた「ケタ」という漁具で海底を掘り起こしながら主に貝類をとる漁です。貝が棲んでいる海底を、ケタの鉄の爪でゆつくりと掘り進みます。「海底に捨てられた刀」がその場所に沈んでいれば貝と一緒に網にかかります。たいていは鞘もなくさび付いていました。時には油紙に幾重にも包まれてほとんどさびずに引きあげられることもありまました。

深江の漁師さんがそれらの刀を当局に届け出たという話は聞いたことがありません。さびの少ない刀はその漁師さんの家の押入れか漁具用の納屋の奥にしまわれました。さびが多すぎた刃物程度のはマキ割りの斧代わりに使われもしました。筆者は幼いころ大人たちのそんな刀の話を聞いて漁具納屋に忍び込んで少しさびの付いた日本刀を探し出し手に取りました。日本刀というものは意外に重いものだと感じた記憶が残っています。周りにひと気のないことを確認しては、その刀を持ち出して家の側にある木の枝を切ったり草をないだりしたのです。ちょうど「チャンバラごっこ」で遊ぶような年頃ですから、本物の刀は非常に魅力のあるものでした。こんな秘めやかな悪戯が出来たのは、浜育ちの子どもの特権であったかもしれません。

磯島の浜はよく魚が釣れる浜でした。磯島町の海岸には、高橋川河口から順に東へ四本の砂防突堤がありました。磯島の海岸は砂浜が広がった海岸ではありません。崩れた堤防の残骸をはじめゴロタ石の多いところです。その海底のせいと砂防突堤の形状が豆腐を並べたようなものでしたから、時節によっては地元の人を中心に釣りで賑わいました。（写真4）



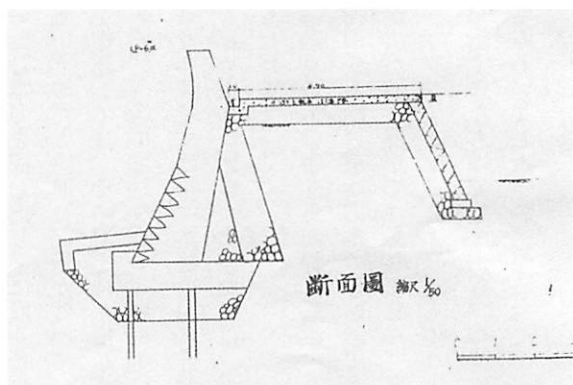
写真4 砂防突堤 魚釣りが楽しめた。遠くに新明和工業甲南工場が見える

防潮堤

昭和二十五年九月にジェーン台風が阪神間を直撃しました。当時、深江の海岸には深江の町全体を高潮から守る防波堤はありません。ただ部分的には、堤防らしきものはありました。ひとつは高橋川河口に東西の長さ約五〇呎、幅四呎高さが水面から四〜五呎ほどの砂の多いセメントの堤防。二番目が磯島の浜の旧海軍の陣地跡の周囲。三番目が東町（現深江南町二丁目）の東寄りの海岸にあったものです。

これらは海岸にある施設や建物を波浪から守る塀をかねたような代物で、鉄筋も入っていないセメントだけで作られていました。そのせいでしよう、ジェーン台風の高潮でそれら堤防はほとんどがバラバラに割れて崩れていました。地震で壊れたビルの残骸が海岸に転がっていると思えば分かりよいかもしれません。

この台風の被害を受けて神戸市は、合併間もない本庄地区で本格



設計図面2 昭和28年の浜戎神社前付近の防潮堤断面図

防補強の道路と間知石積みの痕跡は現在の深江南町三丁目の浜エビス神社跡前にあります。その付近の防潮堤の写真が残っています。高さ六呎の高さが実感できます（写真5）。

深江浜の堤防は直線距離で（高橋川河口から傍示川河口の間）およそ一キ。この間に陸側から浜辺に出るための開口部が全部で五カ所設けられました。西から順に、高橋川河口付近。次に現在の南町三丁目と四丁目の境の札場通りが海岸に突き当たるところ。三番目が浜エビス神社のやや東。四番目が南町二丁目と三丁目の町境道路。五番目が南町二丁目中央付近で旧イワシ加工第一工場前付近の計五カ所です。

開口部の傍には厚さ五呎、縦幅三〇呎、長さ一・五呎ほどの板が積み重ねられていました。これは高潮が予想されるとき開口部

の両端に掘られた溝にこれらの板をはめ込んで潮が「オカ」に流れ込むのを防ぐためです。

今では開口部は南町三丁目と四丁目の境、札幌通りが海岸に突き当たるところに一カ所だけあります。また開口部を閉じるため鉄製の扉が設けられています。

五つの開口部のうち四つまでは陸地側からは、それぞれ一〇段から五段くらいの階段を利用して浜に下ります。ただひとつだけ浜エビス神社の東よりにある開口部だけは、階段ではなく丈夫な木の板を並べたスロープで上り下りするようになっていました。これは前の浜が地引網の引き上げ場所であったためです。地引網で取れた魚はすぐその場で計量し、担いカゴに入れて堤防の内側（陸側）にある三カ所のイワシ加工工場へ運びます。カゴを運ぶのは人が天秤棒で二人で運ぶこともあります。大部分はかつては大八車、のちにリヤカーで運んでいくため階段ではそれが出来ないためです（写真6）。

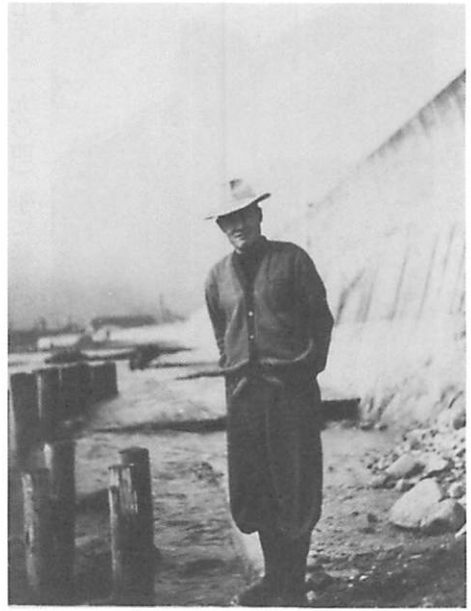


写真5 高さ6呎の防潮堤。写っているのは氷販売業を営んでいた岩本重治氏（岩本喜美枝さん提供）

これら堤防に設けられた海への開口部は、深江の漁師にとって海の様子を見る格好の場所でした。毎日ほぼ定刻にそれぞれの漁師が開口部の階段の踊り場に立って、海を見つめ空を見つめて「日和見」をしていました。同時に互いに今日昨日の漁の様子、明日の見通しなどの情報交換を行っていました。

余談ながら、ジェーン

台風後に造られた防
潮堤は、海岸の埋め立てが完了した後、当局の手によってその上部がすべてにわたって削り取られました。完成直後の堤防は陸側からは大人でも背伸びをしないと海は見えません。すくなくとも今よりは一呎は高いものでした。

昭和二十七年の堤防竣工図面によれば、深江の堤防は海水面（大阪基準）から六呎の高さがあります（設計図面2）。もし、この堤防が竣工当時のままあれば、神戸にも来るかもしれません。かつて深江を苦しめた「高潮」に備えた防潮堤がそのままあれば「津波」から深江を守るものになったかもしれません。



写真6 リヤカーでのイワシの運搬 昭和30年ごろか

本庄小学校の二宮金次郎像

史料館研究員 藤川 祐 作

武庫郡本庄村本庄小学校は、明治三十三年（一八九九）に開校し、翌三十三年三月三日に校舎を建築し、創立記念日とした。平成七年（一九九五）の阪神・淡路大震災で校舎が被害を受け、二年後の平成九年現校舎が建てられた。震災で撤去された鉄筋コンクリート造りの校舎は、昭和十二年（一九三七）木造校舎から建て替えられた。校舎の落成のおり、深江の村民が二宮金次郎石像を寄贈した（写真1）。

二宮金次郎（尊徳）といえば、江戸後期の天明七年（一七八七）、相模国（現在の神奈川県）に生まれ、幼いころに両親を亡くし、没落した生家を立て直し、その後、藩の財政再建をはじめ勤勉、儉約、農村復興などを手掛けた篤農家と言われている。安政三年（一八五六）六九歳でなくなっている。勤勉、儉約などの人柄から、明治三七年（一九〇四）年に修身の教科書に登場してくる。



写真1 本庄小学校の二宮金次郎像

そんな金次郎が銅像として昭和三年（一九二八）に、神戸の篤志家中村直吉によって神戸・明石の小学校・幼稚園に八四体（一部に八三体とも

いわれている）が贈られた。中村は明治一三年（一八八〇）神戸に生まれ神戸証券取引所常務理事として活躍した。太平洋戦争が勃発し、金属の供出のはめになり、代用として石造・陶器などの金次郎像が普及していく。

ここで改めて本庄小学校金次郎像を見ると、後面に贈った三名の氏名などが彫られている。

昭和十二年三月吉日

松井末松

赤井末吉

磯野清治

渡辺石材店

三人はいずれも本庄小の卒業生で深江在住の一族で、赤井末吉は醤油業、松井末松は米穀商、磯野清治は地主だった。どのような理由で金次郎像を母校に寄贈したのかは定かでないが『本庄国民学校沿革史』には昭和十二年（一九三七）の校舎完成を記念して石像が寄贈されたことが明記されており、学校としても三人の寄贈を重く受け止めていたことが判明する。

昭和九年（一九三四）の室戸台風の際、別の鉄筋校舎に逃れて児童が命拾いをしたという被害経験があり、昭和十二年の校舎はこれを教訓に建てられた。それまで、近隣の学校と比べ貧弱な校舎だったため、本庄村の親も児童も肩身の狭い思いをしていた。「引率されて他校を訪問したときの児童の表情にそれが表れていた」という当時の教師の言葉が残されている。それだけに新校舎の完成は村中をあげての喜びだったという。

この校舎には塔屋の上に建つ避雷針に五つの輪が付けられた。当時本庄村は財政が豊かでなく周囲には反対があったが、修身道徳の教師であり漢籍にも詳しい岩谷省三校長の強い希望によって実現した。二宮金次郎像と五輪の塔はセットで造られたのである。だからこそ学校のシンボルとして、戦後も守り抜かれたのだろう。

金次郎像は現在は運動場東のフェンス沿いに西向きに位置している。平成二年（一九〇〇）の『本庄小学校九〇周年誌』では、運動場の北西の花壇の中にあり南向きに位置している。震災に伴う校舎の立て替えのため現在地に移されたのであろう。この二宮金次郎の像については、何時の頃からか本校の児童の間で密やかに語り継がれた「本庄七不思議」の一つとしての話がある。「金次郎さんが深夜に校庭を本を声を出して読みながら歩き回っている」「夜になって誰もいなくなった広い運動場を無言で金次郎さんが走り回っている」という話である。先生が「こわい話」として児童に「勉学の必要性」と「運動の必要性」を語ったのが、いつしか子ども達は単に「こわい話」「不思議な話」として語り継いだと思われる。

今少し二宮金次郎像について筆者が最近目にした像を紹介してみよう。筆者が知る像としては、芦屋市親王塚町の矢部（旧姓関東）文字氏邸内の石像（写真2）がある。大阪府中河内郡南高安村字黒谷（八尾市）居住の父親が、皇紀二六〇〇年すなわち昭和一五（一九四〇）に買い求め、現在地に昭和三五年（一九六〇）頃に移住した際に移したという。震災の折、前へ倒れ書物を持つ両手が手首から折れたが、出入りの植木屋さんに修復してもらった。当時として



写真2 芦屋市親王塚町の矢部文字氏邸の二宮金次郎像



写真3 土庄町大部の備前焼の二宮金次郎像

も個人で所有するのは珍しかったのではないか。昨年別の調査・研究で小豆島へ三度訪島の折、島を一周する機会があり、土庄町大部の公共施設の一角にある備前焼の金次郎像（写真3）を偶然写真に撮ることができた。また島の東海岸にある福田港（小豆島町）近くの廃校になっている福田小学校内に石像一体があり、やはり矢部像同様昭和一五年（一九四〇）とされる。前述した神戸市の中村が贈った銅像が須磨区の千歳公園に遺存しているとのこと。陶像は備前焼だけでなく信楽焼・九谷焼（磁器?）などでもつくられていた。

石像は必ずしも銅像の代用ではなく、昭和三年（一九二八）に名古屋での御大典奉祝博覧会で石像をアピールしたのが最初であるといわれており、岡崎市の石材店が盛んに売り込んだ。前述した通り明治三七年（一九〇四）の教科書に採用されていたが、国策でなかったことから、政府は各学校に像の設置を強要はしていない。私が卒業した小学校には元々金次郎像はなかった。

戦争中は天皇の写真や教育勅語を収めた奉安殿とセットになっていた金次郎像だが、敗戦とともに奉安殿と撤去されたところも少ない。本庄小学校の金次郎像は貴重な現存例である。

昭和三五年頃を最後に金次郎像はほとんど買い手がなくなった。昨今金次郎から何かを学ばなければならぬご時世かもしれない。最後になりましたが、小稿を書くにあたり、矢部女史が集められた資料、森口健一氏資料、神戸新聞（平成十四年四月五日・十月十六日）を使わせていただきました。記して感謝にかえます。

深江弁あれこれ

深江塾

はじめに

漁師町だった深江には、純農村部とは違った独特の言葉が使われた。漁師言葉といわれる言葉である。決して美しいきれいな言葉ではないけれどこれも深江のひとつの文化ではあるまいか。しかし、昭和三十年代に始まるこの地の都市化と共に、こうした言葉も次第に忘れられようとしている。このため深江塾の飯田一雄・三枝照於・松下芳子・寺田喜多子・柳田陽子・森口健一が、深江弁ともいえる言葉を持ち寄って原案を作り、植田延生・津田雅敏・増田行雄・谷岡能史や史料館の方々も加わって精査した。言葉を選ぶに際しては、深江以外の地域でも使われていても、漁師町の言葉を象徴するようなものや、辞書的な意味や他地区とは違った深江独特の意味で使用されているものは採録した。用例をへゝで示し、標準語を(一)で示した。

人をさす言葉・人の様子・人格など

いらち 気の短い人。へあの人ほんまにいらちでなあ。五分と待たれへん

こて 文句や不平・無理なことを言う人。動作や動詞は「こてる」。

へあの人へこてやから、物言うの気イつけいよ。まとまる話もややこしなるで

こせ こせこせと細かいことにこだわって言ったりしたりする人。

わて 私。男女とも使用。

わい 私。原則男性が使用。高齢者は女性も使用。

わたい 私。どちらかといえば女性が使用。
めんめ 面々・おのおの・それぞれ。複数形は「めんめら」。
われ 自分ではなく相手を指して言う。親しい間の会話で使用する場合、「君」程度の意味で特段悪意はないこともある。

【注1】複数の場合には、「わてら・わたいら・わいら」となる。

へわてら、そんなことよう言わんし、ようせんわ(私ら、そののようなことはとても言わないし、することもできない)

【注2】「よう」は下に否定語を伴って「決して、とてもない」の意味となる。

おんどれ お前。目下の者に使ったり、口論喧嘩によく使ったりする。へおんどれ、なにさらしてけつかる(おまえ、何をしている・するのだ)。他者が自分や仲間に対して卑怯な振る舞いや汚いことをしたときなどに、相手を罵倒する意味で使用。

おんどら 「おんどれ」の複数形で語尾が「ら」となったものと思われる。

おえはん・おいえはん 庶民から見てもやや上級階層と思われる家庭の女性に対して使う。その家を訪問したときその奥さんや娘さんと呼んでもらうときへおいえはん、おいでですか(奥様はいらっしゃいますか)

ちんこはん 「小さい」を「ちんこい」ということから大阪弁の「はん」をつけて「小さい人」となったもの。

とも 単に呼びかけのときは「とも」「ともよ」といい「も」にアクセントあり、掛け声のとき「とも」に「しゃ」となる。戦前に深江南地区にあった「若仲宿」で集う同級生・同期生の間でよく使用する。お互いが幼馴染、連帯感の強さを他者に示すときにも使う。

あほたれ 「あほ・ばか」に「たれ」を付けて人を指す。「あかんたれ」の「たれ」も同意。

の「たりん」「脳味噌が足りない・少ない」から転じて「間抜け・

機転が利かない」などに使う。陰口や非難を含むときは「配慮も出ない人」という意味もある。へあいつは、ちよつとノータリンやさかいしゃーないで（あの人は配慮も出来ない人だから、どうしようもないよ）

ぼっさん・ぼっさい おてんば娘。へありや。どうしようもないばっさんや（ぼっさいや）。男児の場合はへあれは、何処の「ごんたや」へこの「ごん太坊主」など、「ごんた」を使用。

きさんじ 素直な人。多くは子ども・幼児に使用し「扱いやすい」「聞き分けのある」の意味。「気散じ者・気苦労のない人」から転じたものか。反対言葉として「ごて」「ごてる」（ごねる）。「ごねる」は「ごねる」の誤用とも。また「死亡した」の意味でも使う。

ぼっそう・ぼっそり ぼんやり者。きりつとしていない人。利発でない人。輪郭のはっきりしない状況の「ぼんやり」と、同「ぼそつと」の合成語か。「ぼんやり者」を「ぼんやり」と同じ使い方。へあんなぼっそりに任せるからいかんのや

ぼてはり 見栄張り。動詞は「ぼてはる」。「はりぼて」を逆さまにした隠語か。「ぼて（太った腹）」をさらに張る意味か。「ぼてふり（棒手振り）・天秤棒を担いで行商すること、人」とは似ているが意味が異なる。へあないに、ぼてはらんでもええのに（あのようは無理して見え張らなくても）へもともとあいつは、ぼてはりやからほつとき（元来、あの人は見え張りだから）

できやま できやまなり。何事にもしゃしゃり出て実際には成果も出せない人。「出来星・成りあがり者」と同じような成語か。無理に人工的に作った山。

できやま 「できやまな人」をさらに面前で言うとき、特にののしるとき。へあいつは、できやまやからな。ほつとかなしやあ

ないで

いちびり 「はしゃぐこと」からつまらぬことでもはしゃぐ軽い人を指す。へ昨日の会議でなあ、あいつは、またいちびつとつたでとつば 「いちびり」する人。「できやま」「ぼてはり」を合わせたような人。へあいつは とつばやねん。ほつとき。好きなようにさしとたらええねん。誰も本気であいてにせえへんで

のんだくれ アルコール依存症に近い人。いつも飲んでいる人。へ飲んだくれの親父を持つ家は大変や

よいたんぼ 酔った人。「あかんぼ（赤ちゃん）」と同種の使用例か。へあの人はいつつも酔いたんぼみたいなこと言うとう

しがんだ・しだんだれ さえない、見栄えのしない様子・人。「しがむ」「皮膚などが縮んで皺がよること。転じてさえない見栄えがしない」から生じたものか。へそんなしがんだみたいな顔するなよへあんな しがんだれと一緒にいたらこつちまでピンボクさなるわ

動作

うとた 歌う・白状する・破産する。へあいつ、先生にしばらくして皆うとてしもたらしい。俺らも正直に謝つたほうがええ（悪さをして、教師にしばらくして、悪事を白状して）

かつちん いわゆる「ブツツン」すること。かんかん・かんかんする 計量器具・計量すること。地引網で取れた魚などを、魚カゴごと大型の秤（かんかん）にのせて計量すること。へ大漁や。はよカンカンせなあかんで

せちべん ケチ、節約家。へあいつせちべんやから貯めてるでへあいつせちべんやから出しよらへんで

はりこむ おごること。少々頑張つて人に振る舞うこと。贅沢をする・お金をつき込んで意味にも使う。へそんな はりこんで大丈夫かいなへ今日は競馬でもうけたんや。せやからはりこん

だるわへはりこんだ着物着てるわ

しばく たたく。「しばきたおす」とも使う。へあのがき、いっぺん
しばきたおさなあかんで。しばくど(たたくぞ)

いてまう・いてもたる やつつける。ひどい目にあわす。半殺しに
する。へわいはあのがきはいてもたる思とんや

さらす する。行う。怒りを含んで問いかける時の例。へ何さらし
とんねん(なにをしているのか)

しい しなさい。やりなさい。へ早よしい。禁止のときは(しいな)
へそんなイヤごとしいな。その子、困ってるやん

ひく 敷く。へここに布団ひくから、ゆつくりしてな
まどう 弁償する。償う。へこわしてしもたなあ。まどてもらうで

いぬ 往ぬ。去ぬ。行くこと。去ること。帰ること。へはよいいな、
おかんが心配するで(早く帰らないとお母さんがしんばいするよ)

へ「さつさといね」(早く帰れ)
くらす 「食べる」の「喰らう」から「食べさせる」の意味。あ
る行為を「受ける」、特に強制的に与える。へゲンコツをくらす

ど
きばる 頑張る。

ゆうたかて 言っても・言ったところで。へそんなこと言うたかて
(いうても) どうしようもない

様子
あかい 明るい。へ日のあかいうちに出かけたほうがええで。くら
なったらあぶない

いっこも ひとつも へあの人シブチンやから金なんかいっこも出
すかない(あの人にはけちだから、お金など一銭も出さないよ)

いとて・いとうて 痛くてへ足の傷がいとうてこれ以上歩けんわ

えーもん よい人・正義漢・特に勲善懲悪の物語などで正義の人を
さす。(子どもがよく使う)へぼくがええもんの役や。お前はわる

もんや

しゃあない 仕方がない・どうにもならない。へ雨も降ってきた。
しゃあないなあ、今日は休みやへお前は、しゃあない奴や店
さきで:へ「もうちょっとまけてえな」「しゃあないな。あんたに
は負けるわ」

しようことなし しかたがなしに・やむをえずへ子どもにいわれて
なあ、しようことなしに来たんや。

しんきくさい 面倒な・陰気な。へそんなしんきくさいこと言いな
はん(そんな面倒で陰気なことを言わないでください)

どうらい たいへんな・面倒な・どうにもならない・取り返しので
かない。へあんたら、どうらいなことしてくれたいなあ。どないし
てくれまんねん(きみたち、取り返しのつかないたいへんことを
してくれたい)。どのような償いをするのですか)

どくしよい ひどい・散々な。へ今日はどくしよいな目にあつたわ。
沖で雨に降られるわ、風は出るはで漁にならんかったや

はがい 思うようにならない・じれったい。へあの子見とつたら、
いつも負けてばかりではがいわ

ぼってん あいこ・同じ・同点。引き分け。子どもの遊びでよく使
う。へぼってんやから勝負なしや

べつちよない 別状(別条)がない、特別な変化や異常がない。心
配はない。(病状などを聞かれて)べつちよないから安心して

どんならん どうにもならない・困る。へそんなことして、どん
らん

ざんない せんないこと。仕方がない。へ言うてもざんないことや
けど

しゃあない しかたがない。しようがない。へどんならんことをし
てくれたな。しゃあないわ。ほな、わてがこないしたる(済んで
しまったことや。しゃあないわ)

しよたことや。しゃあないわ

しよたことや。しゃあないわ

だんない 形容詞 さしつかえない。大事なの転。

びりびり 雨の降り始めて、少しずつ降ってきた様子。ぼつりつり。

そばえる 雨が「びりびり」より、もう少しはげしく降ってくる様子。軽い通り雨。へびりびりして来たでえ。けどそばえやる。

もみない 上方語「もむない」の訛。まずい、おいしくない。

わやくそ 乱雑・混乱・無理・無茶：「わや」と「くそ」付けずに使用もあり。へわやくそにやられた（こてんばんにやつつけられた）へそんな、わやなことするなよ（むちゃしないで）へあいつに家の中、わやにされてなあ。どもならんわ。

少年たちの言葉

ハバ、ハバ 進駐軍が使ったハリイバックを聞きかじりで真似た言葉。「急げ・早く来い」という意味。少年が使用。

ゴスタン 由来不明であるが漁師言葉らしい。舟をバックさせるときに使用した。「ゴスタン、ゴスタン」と言えば「バックオーライ、オーライ」ほどの意味。

テッカンビール 鉄管ビールのこと。学校で水道蛇口から直接飲む水のこと。男子児童が使った言葉。

頭でつかちしりつとり 囁しことばで悪ガキが使用。「しりつとり」は「尻すぼみ」の意味。体のバランスの悪い者からかつて言う。ひとつ〇がある…ひとつ〇がある…ふたつの〇がある…みつつ右にも〇がある…よつつ横にも…五つつもの〇がある…六つつむ

こうに…七つななめに〇がある…八つやっぱり〇…九つここにも…十はとうとう〇だらけ。悪ガキが使用。単に言葉遊びとして仲間同士で声を合わせて言うこともある。頭に来たデキモノのあとに出来た小さな跡を指差してからかつて使用した。

ゆーれん ユーレイ・フルセ（親ハゼ）ともいい極端にやせた魚のハゼ。波止場の釣りに時々かかるが、猫も食べない。

ばばたれ 「ばば」は糞のこと。「たれ」は出すこと。魚の黒鯛・

チヌの幼魚をさす。

接尾語など

へえ はいえ、そいえ・そうえ。「そうなんですよ」の意味で町娘などが用い親しみを表す。京都言葉の「へどすえ」の「え」と同じ例か。

へがいや（え）へそやがいやへそやがいえへで「そうなんだよ」の意味。へあかんがいや（え）へは「だめだよ」の意味となる。

へけつかる 「在る、居る」の卑語。助詞「て」を介して続き、その動作をのしつて言う。へしてけつかるへあんなことさらしてけつかる。

へや 状態を表す語について命令、勧誘など表現を和らげる。へあそのこの店にいこいや（行こうよ）

へなんどいや 疑問、問いかけ。「なん」が「何」の意味。「どい」は「どえ」ともいう。この「ど」は「ぞ」と同じような意味で用いられる。へなんど（ぞ）おいしいものはないか

へえわいや 「ええわ」は良い、大丈夫。「い」「や」が付くと相手との距離を明確にする意図をしめす。「自分の良いように、好きなようにするから」という宣言の意味を含む。

へな 強調の意味。へはいな（そうです・全くそうです）へは同意の強調。

へとう 動詞について様子を表す。「へしている」。へあんなこと言うとう。本来は神戸弁で住吉川以西で使われているとされるが、「とう」は深江でも使われた。

へとん 「へとう」とよく似ているが、主に疑問の形で使われることが多い。へ何ゆうとん（何言ってるのですか？）へ何しとん（何しているのですか？）

へい 場所の基点を示す。へそこい置き（その場所に置きなさい）へここいらがええ場所や（この辺りが良い）

母音の強調

い↓いイ 胃をへいイ・いイが痛い

か↓かア 蚊をへかア・かアがいつぱい飛んでる

き↓きイ 気をへきイ・きイつけて歩きよ

く↓くウ 苦をへくウ・くウかける人や

け↓けエ 毛をへけエ・けエが抜けた

さ↓さア 差をへさア・どっちもさアがない

す↓すウ 酢・巣・簾などをへすウかけて食べる

せ↓せエ 背をへせエ・せエが伸びた

て↓てエ 手をへてエ・てエをたたきいいな

と↓とオ 戸をへとオ・とオ閉めて

な↓なア 菜のことをへなア・なアの煮もの

に↓にイ 荷をへにイ・にイを担いで

ね↓ねエ 値をへねエ・ねエが付かん

は↓はア 歯をへはアが生えてきた

ひ↓ひイ 火をへひイが燃える

ふ↓ふウ 魅をへふウ焼きにはふウをいれる

へ↓へエ 兵隊をへへエたい、塀をへへエなど

ほ↓ほオ 帆をへほオ・ほオ上げる

ま↓まア 魔へまアがさす、間へまアが悪い

み↓みイ 実をへみイ・みイがなる

め↓めエ 目をへめエ

や↓やア 矢をへやア・やアが飛んだ

れ↓れエ 札をへれエ・気をつけ、れエ

ろ↓ろオ 櫓をへろオ・ろオを漕ぐ

わ↓わア 輪をへわア・わアになって踊る

その他の訛り

あそぼ 遊ぼう・あそぼうへ皆であそぼ

いがむ 歪む・ゆがむ

いごく 動く・うごく

えんど エンドウ・エンドまめ

かい 粥・かゆへ芋かい

かいる 帰る・かえるへかいりしなに寄って

がつこ 学校・がつこうへがつこ(頭)はええけれど

けつね 狐・きつねへけつねウドン

こーて 「か」の訛の発音。へけんくあ(喧嘩)

こぶ 買って・かってへこれこーてんか

ごぼ 昆布・こんぶへだしごぶ

ごんだけ 牛蒡・ゴボウ

さど 砂糖・さとう

しゅうろ 棕櫚・シユロ

じょうり 草履・ぞうり

せんせ 先生・せんせいへせんせに言いつける

ぞっせん 雑巾・ぞうきん

だいこ 大根・ダイコン

たなもと 大層・たいそうへたいそに言うな

たのき 台所でいろんな作業をすること。

たばこ 狸・たぬき

つおい 煙草・たばこ

とふ 強い・つよい

なせる 豆腐・とうふ

ねき 撫でる・なでる

「根際」の転。きわ、そばの意味で上方の方言。へわたいのねきへおいで(私の側へ来なさい)へ道のねきに寄らんと危ない(道の端へ寄らないと危ない)へ

びんぼ 貧乏・びんぼうへびんぼひまなし

ふつきん 布巾・ふきん

べんと 弁当・べんとうへべんと持ち

ほてから (時間的に) それから。(何かに) 加えてさらに。へほてからどっかへ行こへほてからこんなこともあつてん

(それに加えてこんな事ありました)

まい 前・まえ・まいかけへ前掛け

まま ご飯。食事。めし。まんま。

ゆわい 祝い・いわいへゆわいめでたの若松様よ

ゆーれん 幽霊・ゆうれい(深江で釣れたハゼの一種を指すことがある)

よばす 硬いものを程よい軟らかさにする。類語に「よばす」「よばらす」がある。これは「弱る」「弱らせる」という意味で使われる。ここから硬いものを柔軟にする、軟らかくするに転じたと思われる。

おわりに——言葉から考える深江の風土と人間関係

「神戸深江のなんどいや」

神戸弁はいわゆる上方、関西弁に比べて「汚い・乱暴」といわれる言葉の一つである。その汚い、乱暴な言葉、言い方の象徴として「神戸深江のなんどいや」がある。深江の人間のやや自嘲をこめた表現である。深江のこの言葉は海辺のいわゆる「ハマ言葉」「漁師言葉」といわれる。海を相手にする仕事はオカの畑仕事に比べれば、その働き場所は戦場といえるだろう。波があり、風があり、板一枚で生死が分かれることもある。網の扱いひとつ、竿や糸のあつかいのちよっとした手違いが漁の成否を分けることもある。指示を出したりミス指摘するときに優しい物言いでは大魚を逃がすのだ。互いの声は厳しく大きいものにならざるを得ない。おっとりした言ひ方では漁はできないのだ。

漁師町でないところから嫁いで来た人が、深江の特に男性の会話を耳にして「どうしてこの人はいつも怒鳴るようになるのかわからぬ。いつも口論しているみたい」といったとか。さらにこの町の人口が増えたころ、新しく「新住民」になったひとは「深江ってガラが悪い」とたいていの人が一度は口にした。中にはそんなガラの悪さを嫌って、わが子が通う学校も芦屋の小学校へ越境させる親もいた。

深江の「なんどいや」は「ワレ、なんどいや」「なんどえ、オンドラ」と一対で使われることがある。このとき「ド」が強く発音され「レ」や「ラ」が巻き舌で発音されると益々乱暴に聞こえる。「なんどいや」「なんどえ」となると相手に発せられるとき双方の関係は穏やかではない。手の早いものは「なんど」から「え」の発音と同時に胸倉をつかんでいる。「なんどいや」の「なん」本来は「何?」という疑問、問いかけの言葉である。「なんやねん」という言い方も上方の言葉で聞かれる。しかし「深江のなんどいや」というときは喧嘩口論の啖呵の一つとなる。江戸っ子なら「何だ、てめえ」、広島なら「なんなら、この外道」というようなものである。

ただ、「なんどいや」は語尾に「や」が付くときは、一呼吸おいた間が出来る。少し柔らかい表現になる。「や」をつけて言うときは、互いにそれ以上に陰悪ムードにはならないのが普通である。

似た言葉に「どなしてん」というのがある。口論になったときの返す言葉で使われる。「それが どなしてん」「どなしたんどいや」「なんどいや」「なんどえ」と関係は悪くなる。ただ「どなしたん」といえば相手を氣遣う表現になる。

同じように「なんどいや」も言い方によって「なあんだ」という安心、安堵を意味することもある。その意味では「深江のなんどいや」もまったく柄が悪いばかりでもないのだ。

「深江のダンゴ」

深江の人間の気質を「ダンゴ」にたとえた表現言葉である。ダンゴは「串ダンゴ」のことである。深江の特に男は、集団になったら強いと言う意味である。団結心があるという意味もある。さらに、リーダーがいなくて固まらず集団にならなければ、だらしがないう自嘲の表現でもある。串ダンゴは一つ一つがくっついてなかなか離れない。これが団結心の強さを表している。一本にまとめる串、すなわちしっかりしたリーダーがいれば強力な集団になるのだが串がなければ「あかんたれ」でしかない。

深江のダンゴという言葉は、深江の町が、昔から海をその生活の場としてきたまちであることに関係があるかもしれない。歴史を紐解けば深江の漁師たちは、近隣の漁師と漁場をめぐって再三争いを繰り返している。時には深江の漁師たちがその舟を連ねて他所の漁師を排除したことも何度かある。そんな時には互いの舟は連係プレーが求められる。しっかりしたリーダーも不可欠であった。

深江の漁師は、幼いころからこの地で育った人が多い。別々の船に乗って漁場に出てもそれぞれの舟には幼馴染が乗っている。事故があれば深江中の漁師がその舟を出して救助や捜索に当たる。これが団結心・連帯感の基でもある。

幼馴染が多く、たどれば互いが親戚であり一族であることが少なくない。この親戚一族の関係は時にライバルとなり反目の原因にもなる。しっかりとした一族の長がいる場合は団結するが、そうでないときはバラバラで、そこに転がっているダンゴでしかないのだ。人間のある集団をダンゴにたとえるならば、別段深江に限らないことである。この地の人は自分たちのことを自嘲気味に「深江のダンゴ」といったのだ。そこに深江の人のユーモアを感じる。

(文責・森口健一)

本庄小の歴史的な写真と展示

史料館館長 大 国 正 美

百十二回目の創立記念日を記念して、三月三日、市立本庄小学校の歴史写真展を、深江塾が学校の多目的ホールで開催した。戦争や災害に翻弄された時代を語る五十一点を展示した。二〇一二年十一月に深江南地域福祉センターで開催したところ、好評で今年は小学校の創立記念行事として初めて開催した。

会場では明治三十三年(一九〇〇)に建てられた木造平屋建ての初代校舎の写真、昭和五年(一九三〇)の男女別々の卒業式や、昭和三十年代は一クラス五十人から五十五人もいる過密教室の風景の写真などを展示。昭和三十年代までは深江の浜で水練が行われたが海が汚染されできなくなりプールが設けられたこと、大正元年(一九一三)に設けられた忠魂碑が木の柵から石垣の柵へと整備されながら戦後は撤去されたこと、昭和四年(一九二九)に建設され昭和九年(一九三四)の室



写真1 明治33年(1900)完成の平屋建て校舎



写真2 大正元年（1912）に建てられた忠魂碑



写真3 昭和初期、校舎の前で銃を構えた訓練の様子

写真4 昭和36年（一九六一）の校舎と海岸線
（森口健一氏収集）

戸台風で児童たちが避難して難を逃れたこと、校庭で銃を構え訓練する隊列、空襲を受けガラスのない校舎に集う児童の様子など、激動の時代の興味深い写真が並べられた。四日には児童も見学した。

◇

収集した本庄小学校の代表的な写真を紹介したい。

写真1は明治三十三年（一九〇〇）完成した平屋建ての校舎で、三月三日に校舎落成式を行った。尋常小学校には裁縫科（本庄裁縫学校）が併設され、校舎正門の東西に建つ白い標柱には、東に「本庄尋常小学校」、西に「本庄裁縫学校」と書かれている。写真2は大正元年（一九一〇）に校庭の西寄りに日清・日露の戦争で亡くなった方の慰霊のため、忠魂碑が在郷軍人によって建てられた。

大正九年（一九二〇）七月、校庭の拡張と共に木造二階建ての新

校舎が出来、昭和四年（一九二九）四月、校庭西端に既存木造校舎に接して鉄筋二階建ての八教室を持つ校舎ができた。この校舎は昭和天皇即位記念事業として、本庄村役場（のち本庄公民館）とともに建設された。昭和九年（一九三四）の室戸台風のとき、児童たちの避難場所となった。写真3は大正九年（一九二〇）完成の木造校舎の前で銃を構えた軍事訓練の珍しい写真である。当時、小学校高等科や青年学校などがしきりに訓練を行っていた。

昭和十二年（一九三七）三月、鉄筋三階建ての校舎が竣工するが昭和二十年（一九四五）五月十一日、川西航空機甲南工場を目標にした米軍B29の空襲を受けた。しかし、天皇の写真や教育勅語を収めた奉安殿は焼け残った。被災当時の写真は『本庄村史』にも掲載している。写真4は昭和三十六年（一九六一）の航空写真である。国道四三号もなく、海岸にはまだ砂浜が残っている。

トライやる・ウィークと史料館

——本庄中学校の生徒を受け入れて——

史料館研究員 高田 祐一

二〇一二年のトライやるウィークは、六月七日・八日に実施した。二名参加予定であったが一名が病欠となり、本庄中学校二年生の端山拓希さんのみの参加となった。

一日目の午前中は史料館の概要や業務についてガイダンスをした。そして博物館の役割や博物館資料の取り扱い方をDVDの映像で学



写真1 「夏の風物詩」の展示

習した。早速学習した内容を実践するために展示替えを体験してもらった。季節展示の「五月人形」から「夏の風物詩」に展示替えをした。展示中の五月人形に異常がないか点検した上で箱に梱包した。「夏の風物詩」の展示では、端山さんに展示をすべてお任せし、レイアウトから陳



写真2 土器洗い

は慣れてきたのか笑顔がみられるようになってきた。

二日目は資料整理の一環として資料の写真撮影をした。撮影の際の明るさや構図などに気を付けながら作業した。その後、博物館の情報発信の体験としてWebサイトなどについてレクチャーした。午後からは史料館のブログを実際に更新してもらった。ブログでは手動マッサージ器を紹介するレポートを書いてもらい、ブログで公開した。掲載写真も午前中に端山さんが独力で撮影した写真を使用した。そのレポートを紹介する。

「手動マッサージ器の紹介」

この資料は昔肩たたきなどに使用されたものです。

端山 拓希

列まで担当してもらった。藤川研究員から一部助言をしたものの、展示物は見やすくカテゴリ毎に整理されており、完成度の高いレイアウトとなった。その後、お昼前と午後からは考古遺物の整理として土器洗いをした。土器を傷つけないように慎重に作業にあたってくれた。午後から

これは肩たたきをする人一人、される人一人の二人に分けてするととても使いやすく、肩たたきをする人も手に力を入れずに肩たたきをすることが出来ます。

この資料を見てみると昔ながらの感じが出てくるし見ているだけではなく実際に手にとって使ってみたい、と思ったりします。

この道具が今家にあって実際に使えるなら電気を使わないので、節電にもなるし、子供が楽しくすすんで肩たたきをできると思います。

この二日間それぞれの仕事を非常に丁寧にしていただいたのが印象的であった。端山さんは土器洗いが一番楽しかったとのこと。やはり本物の資料に触れることは、学校ではできない体験であり関心が高いのかもしれない。これからの活躍を館員一同願っている。

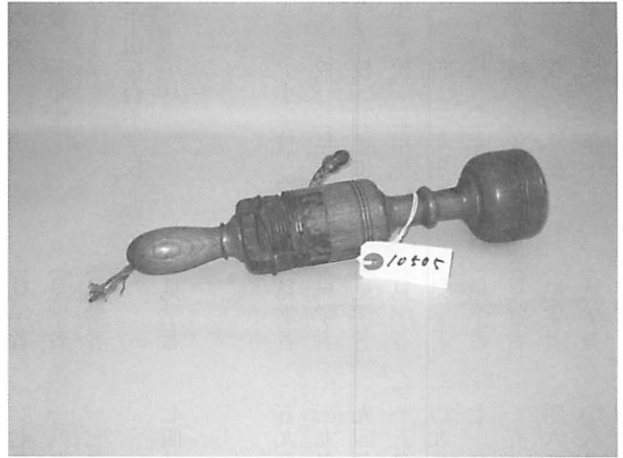


写真3 撮影した手動マッサージ器

史料館におけるIT施策

「webサイトアクセス状況」

史料館では、情報発信のツールとしてWebサイトとブログを運営している。Webサイトとブログへのアクセス状況を報告する。

二〇一三年三月一日時点でWebサイトへの訪問数（ユーザーが開始したユニークセッションの数）は、サイト運営開始時からの累積が一〇三四五訪問であった。昨年の二〇一二年二月一日からの差分が三〇五二訪問で一日あたりが八・〇アクセスで前年比では五%増となった。

ブログはサイト運営開始時からの累積訪問数が一八三三四訪問であった。昨年の二〇一二年二月一日からの差分が一〇八四五訪問で、一日あたりは二八・四アクセスで前年比では四一%増となった。Webサイトでは一日あたりの訪問数が微増しているものの大きな増加はみられない。基本的にWebサイトのコンテンツは前年から増えていないため、前年と同水準になったと考えられる。ブログでは前年比で四一%増と大きく増加している。

昨年度から始めた過去の史料館だよりを紹介する「プレイバック史料館だより」が累積一六回になり掲載している情報量が増えたため検索にヒットしやすくなったためと考えられる。情報の蓄積量に比例してアクセスが増加しているといえよう。二〇一二年度の施策として、より調査成果の普及効果を高めるために、ソーシャルネットワークサービスのfacebookに公式ページを作成した。ブログの記事が自動的にfacebookに配信される仕組みであり、情報の拡散が期待される。またダウンロード可能となっている「史料館だより」のダウンロード数を号毎に把握できるように改善した。

（高田祐一）

史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇一二年四月以降

△二〇一二年▽

6月7日 / トライやる・ウィーク・本庄中学校二年生一名を受け

8日 入れ、二日間史料館業務の体験

7月7日 甲南大学法学部久保ゼミ (見学者 二〇名)

7月13日 東灘区役所職員研修 (見学者 二九名)

7月28日 わくわく東灘(東灘区役所) (見学者 二一名)

10月7日 魚屋道を歩く会 (参加者 七〇名)

10月13日 深江歴史探訪まち歩き (見学者 四四名)

10月20日 東灘九条の会 (見学者 二〇名)

11月11日 六甲自然案内人の会 (見学者 八名)

11月18日 明舞九条の会 (見学者 七名)

11月20日 八多小学校 三年生 (見学者 一八名)

大手前大学 (見学者 一七名)

11月27日 宝塚市立中山桜台小学校 三年生 (見学者 七四名)

△二〇一三年▽

1月15日 六甲アイランド小学校 三年生 (見学者 五九名)

1月18日 福池小学校 三年生 (見学者 一三九名)

1月22日 稗田小学校 三年生 (見学者 九四名)

1月24日 本山南小学校 三年生 (見学者 一一五名)

1月25日 御影小学校 三年生 (見学者 一〇九名)

1月29日 灘小学校 三年生 (見学者 七一名)

1月31日 本山第三小学校 三年生 (見学者 一一五名)

2月1日 東灘小学校 三年生 (見学者 一四六名)

2月8日 本山第二小学校 三年生 (見学者 二〇八名)

2月12日 本山第一小学校 三年生 (見学者 一五四名)

2月14日 向洋小学校 三年生 (見学者 九二名)

2月15日 福住小学校 三年生 (見学者 一〇一名)

2月19日 東灘小学校 三年生 (見学者 三六名)

2月22日 西灘小学校 三年生 (見学者 七三名)

2月25日 本庄小学校 三年生 (見学者 一〇六名)

資料寄贈者ご芳名

(敬称略・二〇一二年一月)以降

大川 弘・土井ますみ・辻淳喜(藤川祐作記)

編集後記

深江を歩くシリーズは今回は浜辺です。漁村ならではの風景の回想を知っていただければと思います。また漁村特有の言葉を深江塾の皆さんと集めてみました。漁師町らしい雰囲気と言葉の中にも残っていました。これも時代とともに忘れられようとしています。また昨年度開催した本庄小学校の写真展を、今年度は本庄小学校の創立記念行事の一環として学校で開催することができました。協力いただいた皆さんに深く感謝いたします。

「生活文化史」 第41号 2013・3・31

編集/大國正美

発行/神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-17

☎ 078-45314980 (FAX兼用)

<http://homepage2.nifty.com/fukae-museum/>